

学生海外調査研究	
18 世紀初頭スコットランド南西部地域の土地所有者層に関する史料調査	
河内山 朝子	比較社会文化学専攻
期間	2009 年 7 月 3 日～2009 年 7 月 23 日
場所	グレートブリテン及び北アイルランド連合王国 スコットランド、エディンバラ及びカークブリ
施設	ナショナル・アーカイヴス・オヴ・スコットランド、ナショナル・ライブラリー・オヴ・スコットランド、ホーネル図書館、ステューワート博物館

1. はじめに

本調査は、1724 年、スコットランド南西部ギャロウェイ¹で起った大規模な借地農反乱²の原因となった農業改良に関する研究のためのものである。今回の調査の主な目的は、土地所有者層の実体を探求するための手掛かりを得ることである。

筆者が取り組もうとする研究は、スコットランド史において、1724 年ギャロウェイの大規模借地農反乱の原因となった囲い込みと借地農立ち退きが、スコットランド最初期の農業改良のひとつと見なされていること³を知ったことに始まる。1724 年のギャロウェイの囲い込みは、スコットランド全土で農業改良が開始される 1760 年代とは数十年の隔たりがあり、改良目的も放牧業偏重という特徴を持つ。そこで筆者は、全土的農業改良との間にあるこの時期的隔たりと目的の偏りに疑問を持った。そのため、まず反乱の原因となった 1724 年のギャロウェイの囲い込みが同時代的にどのように認識されていたのかということに焦点を当てながら、3 種類の反乱基本史料を分析した。それは、活字化されている 7 通の土地所有者層の手紙⁴と反乱借地農たちの声明パンフレット⁵、そして反乱の原因となった「農業改良」に対する同時代人の見解を示したパンフレット⁶である。土地所有者層の手紙からは、「貨幣収益」を重視する言葉は見受けられたが、囲い込みと立ち退きの強行に疑問を持つ言葉は見受けられなかった。しかし、2 つのパンフレットから、原因となった囲い込みの実行は、当時必ずしも正当な農業改良として認識されていたわけではなく、「貨幣収益」に翻弄された土地所有者層の、国政と国教信条のいずれにも反する行為と認識し得るものであったことがわかった。

そこで次に、ギャロウェイの地方史を概観してみた。すると、今日の研究において先進的だったという見方もある 1724 年のギャロウェイの囲い込みの実行は、それ以降のギャロウェイ地域全体の農業発展に直接的には影響しなかったことがわかった⁷。つまり、1724 年のギャロウェイの囲い込みが、地域全体

の発展という展望に対する配慮を欠いた、一部土地所有者層の貨幣収益を動機とする横暴な行為である、という同時代の批判には少なくとも一理があったように感じられる。借地農の存在を軽視した農業改良に対する批判は、ギャロウェイの囲い込みのみに向けられるものではなかった。スコットランドの他地域における農業改良成功事例では、借地農の処遇について考慮されていることが多い⁸。その中で特徴的なのは、土地所有者と借地農の交渉と土地所有者側の妥協と投資である。1724 年のギャロウェイの囲い込みでは、これがほとんどなされていなかったことが窺われる。これは、他地域における農業改良成功事例とこの囲い込みの間にある相違点である。

既存研究において、この相違点を具体的に分析したものは見当たらない。反乱の原因となった囲い込みが先進的な農業改良の端緒とされる一方で、性急な農業改良の方法をめぐる土地所有者側の意図や主張の分析は、1724 年のギャロウェイの反乱研究という点でも、農業改良研究という点でも、課題として残っていると思われる。したがって、この課題を明らかにする手掛かりとして、土地所有者層に関する史料を読むことを今回計画した。これを読むことで、スコットランド史上稀有な借地農と土地所有者の衝突の背後にあるギャロウェイの土地所有関係を紐解き、そこから 18 世紀スコットランドにおけるジェントリ（土地保有階層）と社会の関係を明らかにすることに意義があると考えた。

調査場所は、エディンバラのナショナル・アーカイヴス、ナショナル・ライブラリー、反乱の起ったギャロウェイのカークブリにあるホーネル図書館の 3 箇所を選んだ。次に調査の実際を述べる。

2. ナショナル・アーカイヴス調査における二つの文書群

ナショナル・アーカイヴスにおいては、二つの文書群を調査した。一つは、クラーク家文書(GD18, Papers of Clerk family of Penicuik, Midlothian

(1373-1966))の中にある、1715-1730年のジェイムズ・クラークの書簡群(GD18/5288)、69点である。GD18/5288は、第一代、第二代男爵ジョン・クラークとその後継者たちに関係するクラーク家文書のうち、第二代男爵ペニーcookのジョン・クラーク(1676-1775)の兄弟、スコットランド南西部カークブリ州の徴税官ジェイムズ・クラークとジョンとの間でかわされた書簡群である。

この書簡全69点中の5点(GD18/5288/45-49)は、1967年に全文が活字化された。その内容は、1724年、スコットランド南西部ギャロウェイの囲い込みをめぐる借地農たちが大規模な反乱を起した際、エディンバラに住むジョンにジェイムズが5週間に渡って反乱の様子を伝えたものである。この5通の手紙は、1700年代初頭数十年分のカークブリ州裁判記録の所在が不明である現在、反乱経緯の詳細を知る基本史料となっている。既存研究においては、この5通から反乱の時系列的な事実を拾い出し、主に反乱借地農の行動を提示していた。

しかしながら、この5通から反乱の事実経過だけを拾い出すのは、書簡の筆者であるジェイムズの意図や彼の置かれていた背景と反乱の関係を見落とした一面的な扱いであるといえる。カークブリにおけるジェイムズの身分は、土地所有者というよりは地方官吏と見なすのが妥当であるが、1724年時点において、クラーク兄弟はそれぞれ地方官吏、中央官吏を行いながら農業に強い関心を持っていた。このような関心を持つ兄弟の間で5週間にわたる反乱の報告が1715-1730年の書簡全体を通して特異な位置を占めているのかどうか、ジェイムズ自身の認識においてこの反乱がどのような位置づけにあったのか。これらを前後関係から知ることは、反乱の社会的背景を知る一助となると考えられる。また、一連の書簡を読むことで、この5通だけではわからない土地所有者側の囲い込みと立ち退き強行の理由を垣間見ることができのかもしれない。したがって、GD18/5288、69点を読む目的は、ジェイムズの農業への言及、日常の関心事、人物交流を知り、その中で5通の報告がどういった意図で書かれていたかを推測すること、また、ジェイムズの記述から反乱に対する土地所有者側の主張を垣間見ること、この2点であった。

GD18/5288の現状は、2点の枝番号を含めると全71点である。うち67点がジェイムズからジョンへの書簡、4点がジョンの覚書である。書簡はすべて紙、大半がフォリオ(二つ折り)であり、一部1枚紙もある。1枚紙の中には、経年による劣化でフォリオが分離してしまったものも含まれる。発給関係がわかるのはフォリオ最終ページ部分にある宛名と、内容の文頭にある記載年月日と記載場所、文末にある差出人の署名である。宛名は多くがTo The Much Honoured, Mr John Clerk of Pennycook Younger, One of the Barons of his Majesty Exche

qr(Exchequer), North Brttain, To the care of Postmasters, Edinburghとなっている。文頭にある書簡の記載場所は、ある時期まで様々だが、1723年12月以降、カークブリに落ち着いていく。じつはジェイムズがカークブリ徴税官に任命されたのがこの年だったのである。差出人の署名は、1720年12月頃よりJames ClarkからJa(mes) Clark(Clerk)となり、1723年12月頃より署名の後に花押のようなものが付くようになり、1726年9月頃より署名の前にCustom O(fficer)が付くようになる。

内容については、この文書群がGD(Gifts and Deposits)という所蔵分類に属している性質上、まだ厳密に検討していない現段階でここに詳細を述べることはできない。ナショナル・アーカイヴスの電子カタログに掲載されている範囲で概要をここに紹介すると、1715年はオランダにおけるジャコバイト反乱に関する情報流布について、1716年代はオランダとロンドンにおける彼の商業活動について、1716年5月から1719年6月はオーストラリアにおける貿易活動について、そして1720年代は南海泡沫事件についての記載が見られる。ひとつの予測として現段階で述べられるのは、これらの記述には1715-1717、1721-1742年のウォルポール政権時代を想起させるに十分なものがあるということである。つまり、書簡群を通底する時代的要素の存在が強く感じられるのである。また、このような流れにおいて、反乱叙述として有名な5通だけが、それ以外のものとは性質を異にして突出しているわけではないことも推測できる。今後はこれを具体的に検討し、活字化を目指してしかるべき諸手続きも取っていきたい。

二つめの文書群は、1715年から1721年にかけてのカークブリの大土地所有者バジル・ハミルトンの没収所領に関する一連の文書群である。Exchequer Recordsと呼ばれる所蔵分類に属するこの文書群は、1715年のジャコバイトの反乱に加わった者たちから没収した土地に関する文書が集められている。この文書に目を通す意義は、没収所領文書の中に、1724年の借地農反乱にかかわった土地所有者バジル・ハミルトンと借地農の関係をすることが可能な史料があるかどうかを確認するためである。

1724年のギャロウェイの借地農の反乱において、大規模な囲い込みと立ち退きの引き金を引いたのは、ギャロウェイの大土地所有者、バジル・ハミルトンだった可能性がある。それは1724年の反乱基本史料において、バジル・ハミルトンほど多く名前のあがる土地所有者はいないからである。しかし、これまでバジル・ハミルトンを初めとする土地所有者、反乱の起った所領の土地所有関係について具体的に論じた研究はない。そのうえ、先に述べたように、反乱当該地域であるカークブリにおいて1700年代初頭数十年分の裁判史料の所在が不明であるため、反乱に関する土地所有者と借地農の具体像が不明なままである。したがって、1715年の没収所領文書群を

見ることで、反乱が起る以前の土地所有関係を知る手掛かりとなる史料の有無を確認することが、バジル・ハミルトンに関わる *Exchequer Records* を閲覧する目的であった。

6つある文書群のうち4つは、所領没収に対する異議申立てに関わる文書群である。これらはバジル・ハミルトンの持つ所領の由来、所領維持の意図を知るため、また訴状の証人の署名からは同家と関係の深い人物を知るために有効な史料であると考えられる。残る2つの文書群のうち、一つは農地の契約内容を列挙したものである。もう一つは地代帳を集めたものである。これらからは1715年頃の契約借地の場所、借地農の名前、地代とその種別などを知ることが可能であり、土地契約関係を知るのに有効な史料であると考えられる。地代帳にあげられているのは数百箇所の農地である。借地農は一つの農地を一人で契約している者もあれば、複数人で契約している者もある。これらの地代帳からは、既存研究でスコットランドにおいては18世紀半ばまで地代は現物によって納められていたとされているのとは異なる印象を受ける。つまり、貨幣地代の割合の方が多いのである。このことは先のジェイムズ・クラーク書簡に見られる時代的要素と併せて、今後検討に値すると思われる。しかし、今回、この史料を調査する時間が十分ではなかったため、さらなる調査が必要である。またそれと共に、これらの地代帳から予測し得る追加史料を探す努力も必要であると思われる。

3. ホーネル図書館調査における19世紀ジャーナリストの覚書

ホーネル図書館へは、*A Short Account how far the Facts set Forth in an Anonymous and False Paper delivered to Major DuCary Concerning the Pretended Hardships of the Tenants in Galloway are disproven by the Examinations taken before the J.P.s of the Stewarty of Kirkcudbright, in obedience to His Majesty's Commands.* という手書き史料1点を調査するために赴いた。この史料は、反乱借地農に対する土地所有者層の見解として、既存の論文に引用されていたものである⁹。既存研究において、出典がはっきりしている反乱借地農に対する土地所有者側の見解が少ないため、この史料の全文を確認するのが目的であった。

これは125ページの史料冊子の中の14ページであった。図書館員J.アラン氏の説明によれば、この鉛筆書きによるマニュスクリプトは、19世紀のジャーナリストがカークブリのことを書くために、自分の覚書として、当時は存在していたパンフレットの全文を書き写したものだろことである。写しによればこれは1724年の発行とされているが、原文書の所在はいまのところ不明とのことだった。

内容は、タイトルからもわかるように、反乱借地

農の主張は大袈裟であり、苦境に立たされた振りをしているということが、実名と具体例をあげながら述べられている。反乱の原因である強制立ち退きについて、既存研究では反乱借地農側のパンフレットが主な史料とされているため、その規模は一つの農地で十数家族から数十家族という記述を目にすることが多いが、この史料の記述によれば、反乱借地農たちが反乱の根拠とする強制立ち退きの規模は、ほんの3-4家族であるとされている。

この史料冊子には、1724年に書かれたとされる写しがこの他に7点ある。興味深いものとしては *Queries for several gentlemen against the Levellers and answers thereto.* という9ページの写しがある。これは、土地所有者側による主に法解釈に基づく反乱借地農批判であり、10箇条以上項目をあげた詳細な記述である。また、193ページの別の史料冊子にも1724年の反乱に関係する記述の写しがいくつかある。これらのことから、反乱をめぐる土地所有者層の言説は19世紀時点では存在していたことがわかる。

この他、ホーネル図書館では、前回マイクロフィルムで利用した基本史料¹⁰の原本を見せていただき、読解不能部分を解明することができた。

4. ナショナル・ライブラリー調査における基本文献と18世紀のパンフレット

ナショナル・ライブラリーでは、ナショナル・アーカイヴス閉館後の数時間とナショナル・アーカイヴス休館日である土曜日午前を利用し、可能な範囲で調査を行った。具体的には日本では入手できない基本文献とバジル・ハミルトンに関するパンフレット1点の閲覧を行った。

主な基本文献は、J.E.ラッセルの *Gatehouse and District* (Dumfries, 2003) である。ゲートハウス (Gatehouse) とはカークブリ西部にあるギャロウェイの主要地域のひとつである。この文献は、宗教改革、市民革命、議会合同、そして産業革命以降の歴史的背景を鑑みながら、ゲートハウスの農業の起源、土地所有者の出現、農業の発展について、記述されている必読文献のひとつであった。しかし、これは地方史関係出版社から出され早期に絶版になり、出版年が新しいためかブリテン島所蔵図書館から貸借することも適わなかった。したがって、今回ナショナル・ライブラリーでこれに目を通すことにした。

この本は全2巻1030ページである。第1巻では古代から1995年までのゲートハウス社会成立と展開について地域名称、人名を具体的にあげながら記述されている。第2巻は補遺集であり、第1巻よりも詳細な具体例とデータが史料に基づいて提示されている。ゲートハウスは反乱に直接関係する地域ではないが、ギャロウェイ内のある地域の歴史について長期的かつ詳細に扱った研究はこれまでなく、17-18世紀ギャロウェイの土地所有関係の成り立ち、有力者のネットワーク、教会と土地所有者層の関係などを

知るのに大変重要な文献であることがわかった。また、各章ごとに参考文献が豊富に提示されており、滞在中それらの文献のいくつかを探し購入することができた。

バジル・ハミルトンに関係するパンフレットは、ESTC¹¹に含まれるナショナル・ライブラリー所蔵のフルスキャップ版 4 ページの史料である。内容は教区教会牧師選出をめぐる判決内容を周知するもので、ここから教会と土地所有者層の関係、土地所有者層の中に存在した階層と派閥を垣間見ることが可能であると思われる。しかし、これは 1724 年反乱の数年後の史料であり、内容、時期ともに、ナショナル・アーカイヴスとホーネル図書館で調査した史料とは論点を分ける必要があると考えられる。

この他にも、ナショナル・ライブラリーにはスコットランド史に関わる基本文献が閲覧室に配架され自由にそれらを閲覧できるため、18 世紀ギャロウェイ土地所有者の氏名と土地の規模を確認する手掛かりとなる情報を入手することができた。

5. おわりに

これまで見てきたように、今回調査した諸史料からは、1724 年のギャロウェイの借地農反乱には次の 3 点からギャロウェイの土地所有者、あるいはジェントルマン側の背景が強く影響していたことが窺われる。一つめはナショナル・アーカイヴス調査における 2 つの文書群に見る時代的要素である。とりわけ貨幣収益に対する土地所有者層の姿勢については、基本史料の記述が示すとおり借地農との間に大きな齟齬があったと思われる。加えて、貨幣収益に関する土地所有者側の独特の事情があったことが予測される。二つめにはホーネル図書館調査におけるパンフレットの写しに見る綿密な法解釈に基づく土地所有者側の主張である。そこでは主にブリテン中央政府による法令が引用され、確認するようにひとつひとつ丁寧に書かれている。ここからは、基本史料に残っている借地農側の主張に「私たちは法に無知な者です」とあることが、かなり切実なものであったことが想起される。三つめはナショナル・ライブラリー調査における基本文献とパンフレットに見る土地所有者層のギャロウェイ社会に与えていた影響力である。2 つの資史料からは、ギャロウェイにおいては、スコットランド南西部沿岸という地勢的要因から、王権と宗教的権威の両方から土地所有者層に特権が与えられ、それが長く維持されていたことが窺われる。

本調査の成果として、前者 2 点については、1724 年までのギャロウェイ・ジェントルマンの実体のひとつとして検討してまとめた。予定としては『人間文化創成科学論叢』に投稿を考えている。後者 1 点については、ギャロウェイの土地所有者層に与えられていた特権が土地所有者層の自律的活動をどのように形成し、1724 年の出来事にどのように影響し

たのかをさらに探る必要があり、それは次の課題になると考えている。

今回の調査からは、他地域では見られないギャロウェイの特異性というものが見られる。これは近代化に向かうスコットランドにおいて、地方に備わった自律性の存在を推測させる。1724 年の出来事は、単に農業改良過程における借地農の土地所有者に対する反乱ではなく、土地所有者を取り巻く状況のこの地域特有の変化が、現物による地代貢納、借地農の慣習的保有権維持、相互扶助的な借地農共同体による農作業といった、それ以前の社会基盤と土地所有者層とを激しく衝突させた可能性があると考えられる。これを考察することは、17 世紀から 18 世紀にかけてのブリテンの統合と再編成についてスコットランドの一地方の視点から再検討を加え、その過程におけるスコットランドの歴史的位置づけを再考することを可能にすると考える。

T.M.デヴァインは、ギャロウェイを含むロウランド地域において 1760 年代以降に起る大規模な住民移動に注目し、これをロウランド・クリアランスとした。そして、1724 年のギャロウェイにおける借地農の立ち退きも、この事象のひとつと見ている¹²。近代化過程で起こった、この多くの人々の国外移動、国内における人的資源の大幅な配置転換は、近代化に成功した稀有な後発資本主義国、日本と比較して興味深い。本研究をさらに進めていくことで、遠い先には日本の近代化事象との比較考察も可能になると考える。このことも視野に入れ、今後も本研究を継続していきたい。

注

1. ギャロウェイは、ウィグタウン州とカークブリ州をあわせた地域。スコットランド西海岸の最南端にあり、アイリッシュ海とソルウェイ湾に面している。西側がウィグタウン、東側がカークブリ。
2. ギャロウェイ・レヴェラーズの反乱と呼ばれる。レヴェラーズとは囲い込みを破壊する者たちの意。土地所有者らの畜牛飼育のための囲い込みと借地農の契約解除と立ち退き実施に反対して、1724 年 3 月頃から反乱が始まり 1 年以上続いたとみられる。反乱規模は、多いときは 1000 人の規模で起こり、その活動形態は、2 つの州を越えて各教区協会の扉に貼られた指示に基づいて動くなど、組織的だったとされる。詳しくは William Mackenzie, ed., Andrew Symson, *The History of Galloway, from the Earliest Period to the Present Time, in Two Volumes, Illustrated with Maps* (Kirkcudbright, 1841), 393-403; A.S. Morton, "The Levellers of Galloway", in *The Transactions of the Dumfriesshire and Galloway Natural History and Antiquarian Society* (以下 TDGNH&AS), 3-19 (1933), 231-262; John Leopold, "The Levellers' Revolt in Galloway in 1724", in *Scottish Labour History Society*, 14 (1980), 4-29.

3. James E. Handley, *Scottish Farming in the Eighteenth Century* (London, 1953), 199-201; T.C. Smout, *A History of The Scottish People 1560-1830* (London/New York, 1969), 324-331; Donnachie, Ian/Innes F. Macleod, *Old Galloway* (Newton Abbot, 1974), 48-60; Donnachie, Ian/George Hewitt, *Scottish History* (Edinburgh, 2007), 189などを参照。
4. W.A.J. Prevost, ed., “Letters Reporting the Rising of the Levellers in 1724”, in *TDGNH&AS*, 3-44 (1967), 196-204, (National Archives of Scotland, Clerk of Penicuik Muniments, No. 5288/45; No. 5246/5/144.)
5. National Library of Scotland (以下NLS), Mf.G.0639(34) Microfilm of Ry. III. c. 36(82), Anon., *An Account of the Reasons of Some People in Galloway, Thier Meetings anent Publick Grievances through Inclosures* (Edinburgh?, 1724).
6. NLS, Mf.G.0639(33) Microfilm of Ry.III.c.36(81). Anon., *News from Galloway; or; The Poor Man's Plea against his Landlord in a Letter to a Friend* (Edinburgh?, 1724), (以下 *News from Galloway*) .
7. James Webster/Board of Agriculture, *General View of the Agriculture of Galloway, Comprehending the Stewartry of Kirkcudbright and Shire of Wigton with Observations on the Means of Its Improvement* (Edinburgh, 1794); G.W. Shirley, “Two Pioneer Galloway Agriculturist: Robert Maxwell of Arkland and William Craik of Arbigland”, in *TDGNH&AS*, 3-13 (1927), 129-161; E.J. Cowan, “Agricultural Improvement and the Formation of Early Agricultural Societies in Dumfries and Galloway”, in *TDGNH&AS*, 3-53 (1978), 157-167; D.E. Marsden, “The Development of Kirkcudbright in the Late 18th Century: Town Planning in a Galloway Context”, in *TDGNH&AS*, 3-72 (1997), 89-96; Lorna J. Philip, “The Creation of Settlements in Rural Scotland: Planned Villages in Dumfries and Galloway, 1730-1850”, in *Scottish Geographical Journal*, 119-2 (2003), 77-102.
8. William Mackintosh, *An Essay on Ways and Means for Inclosing, Fallowing, Planting, &c. Scotland; and That in Sixteen Years at Farthest, By a Lover of His Country* (Edinburgh, 1729); John Miller Gray ed., John Clerk, *Memoirs of the Life of Sir John Clerk of Penicuik, Baronet, Baron of the Exchequer, Extracted by Himself from His Own Journals, 1676-1755* (Edinburgh, 1892), 137; 菊池紘一「18世紀スコットランド地主と村落創設運動」、『社会経済史学』37-6 (1972), 1-23; 同「18世紀スコットランド農書史概観—その特質と意義」、『社会経済史学』51-2 (1985), 60-79 ウィリアム・ファルガスン、飯島啓二訳『近代スコットランドの成立—18-20世紀スコットランド政治社会史』未来社 (1987), 170.
9. Leopold, *op.cit.* (1980), 24.
10. NLS, *News from Galloway* (1724).
11. The English Short Title Catalogue の略。1473年から1800年に主にブリテン島で発行された出版物が、ブリテイッシュ・ライブラリーによって収集、目録化されたもの。全460,000点。このうち、およそ2,000点は他館所蔵。このパンフレットはそのうちのひとつである。
12. T.M. Devine, “Social Responses to Agrarian Improvement: the Highland and Lowland Clearances in Scotland”, in R.A. Houston/I.D. Whyte eds., *Scottish Society 1500-1800* (Cambridge, 1989); *Clearance and Improvement: Land, Power and People in Scotland, 1700-1900* (Edinburgh, 2006).

こうちやま あさこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

【指導教員のコメント】

河内山さんは、17・18世紀スコットランドの農業経済史に関心があり、類似の研究がほとんどない我が国ではそのこと自体貴重な研究であると言えます。18世紀はじめにスコットランドでおきた農民反乱と農業改良との関係を修士論文で扱ったあと、より視野を広げ前近代スコットランドにおける伝統的領主農民関係の実態を探ることに取り組んでおり、そのために今回の海外調査研究を行いました。その結果、伝統的な領主農民関係のほころびと、今回の調査で新たに判明した事実すなわちスコットランド、キャロウェイ地方への比較的早期からの貨幣経済の浸透とが、結びついているのではないかという重要な視点の発見に至りました。さらに本助成により、スコットランド文書館での資料調査や現地の研究者・史料館員とのコネクションができたことは、河内山さんの博士論文執筆に向けて重要な一歩になったと考えます。

(お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 准教授 新井 由紀夫)